

ヘフリガー／日本の歌曲を歌う(ドイツ語訳による)

Ernst Haefliger Singt Japanische Lieder

- | | |
|---|--------|
| ① この道 (北原白秋作詞/山田耕筰作曲)
Erinnerung [H.Kitahara (1885-1942)-K.Yamada (1888-1965)] | [2:06] |
| ② 待ちぼうけ (北原白秋作詞/山田耕筰作曲)
Umsonst gewartet! [H.Kitahara-K.Yamada] | [1:44] |
| ③ ちんちん千鳥 (北原白秋作詞/近衛秀麿作曲)
Regenpfeifer [H.Kitahara-H.Konoe (1898-1973)] | [2:18] |
| ④ 朧月夜(高野辰之作詞/岡野貞一作曲)
Verschleierte Mondnacht [T.Takano (1876-1948)-T.Okano (1878-1941)] | [1:28] |
| ⑤ 故郷 (高野辰之作詞/岡野貞一作曲)
An die ferne Heimat [T.Takano-T.Okano] | [1:13] |
| ⑥ 花 (武島羽衣作詞/瀧 廉太郎作曲)
Blüte [H.Takeshima (1872-1967)-R.Taki (1879-1903)] | [2:34] |
| ⑦ 城ヶ島の雨 (北原白秋作詞/柴田 貞作曲)
Regen auf der Insel Jogashima [H.Kitahara-T.Yamada (1885-1959)] | [4:01] |
| ⑧ 浜辺の歌 (林 古溪作詞/成田為三作曲)
Am Meer [K.Hayashi-T.Narita (1893-1945)] | [1:48] |
| ⑨ 荒城の月 (土井晩翠作詞/瀧 廉太郎作曲)
Ruine im Mondschein [B.Tsuchii (1871-1952)-R.Taki] | [5:42] |
| ⑩ 雪の降る街を (内村直也作詞/中田喜直作曲)
Grüß mir die tief verschneite Stadt [N.Uchimura (1909-1989)-Y.Nakada (1923-2000)] | [4:25] |
| ⑪ 早春賦 (吉丸一昌作詞/中田 章作曲)
Sehnsucht nach dem Frühling [I.Yoshimaru (1873-1916)-A.Nakada (1886-1931)] | [2:42] |
| ⑫ さくらさくら (日本古謡)
Kirschblüte (Anon) | [1:59] |
| ⑬ からたちの花 (北原白秋作詞/山田耕筰作曲)
Quittenhecke [H.Kitahara-K.Yamada] | [2:01] |
| ⑭ 椰子の実 (島崎藤村作詞/大中寅二作曲)
Kokosnuß [T.Shimazaki (1872-1943)-T.Oonaka (1896-1982)] | [2:38] |
| ⑮ かやの木山 (北原白秋作詞/山田耕筰作曲)
Maronenberg [H.Kitahara-K.Yamada] | [2:32] |

- ⑩ 平城山 (北見志保子作詞/平井康三郎作曲)
Narayama [S.Kitami-K.Hirai (1910-2002)] [3:14]
- ⑪ 赤とんぼ (三木露風作詞/山田耕筰作曲)
Erinnerung an die Kindheit [R.Miki (1889-1964)-K.Yamada] [2:27]
- ⑫ ベチカ (北原白秋作詞/山田耕筰作曲)
Am Kamin [H.Kitahara-K.Yamada] [5:01]
- ⑬ 出船 (勝田香月作詞/杉山長谷夫作曲)
Abschied [K.Katsuta-H.Sugiyama (1889-1952)] [2:34]
風に寄せてうたへる春のうた (三木露風作詞/山田耕筰作曲)
Kaze-Ni-Yosete-Utaeru-Haru-No-Uta [R.Miki-K.Yamada]
- ⑭ I. 青き臥床をわれ飾る
I. Aoki-Fushi doko-Wo-Ware-Kazaru [1:52]
- ⑮ II. 君がため織る綾錦
II. Kimi-Ga-Tame-Oru-Ayanishiki [2:04]
- ⑯ III. 光に顔ひ日に舞へる
III. Hikari-Ni-Furui-Hi-Ni-Maeru [2:37]
- ⑰ IV. たたへよ、しらべよ、歌ひつれよ、
IV. Tatahe-Yo, Shirabe-Yo, Utaiture-Yo [1:47]
- [ボーナス・トラック]
(1993年11月1日大阪ザ・シンフォニーホールにおけるライブ)
- ⑱ 朧月夜(高野辰之作詞/岡野貞一作曲)
Verschleierte Mondnacht [T.Takano-T.Okano] [1:51]
- ⑲ 早春賦(吉丸一昌作詞/中田 章作曲)
Schnsucht nach dem Frühling [K.Yoshimaru]-A.Nakada [2:40]
- ⑳ この道 (北原白秋作詞/山田耕筰作曲)
Erinnerung [H.Kitahara-K.Yamada] [2:36]

エルンスト・ヘフリガー (テノール)
Ernst Haefliger (Tenor)
イリーナ・ニキーティナ (ピアノ)
Irina Nikitina (Piano)

ドイツ語訳: 村上紀子 & マルグリット・畑中 (⑩-⑱, ⑳-㉔)
German-Lyrics translators: Noriko Murakami & Dr. Margrit Hatanaka
歌唱: ドイツ語 (⑩-⑱, ⑳-㉔)、日本語 (㉔-㉕)

録音: 1992年5月20日-22日 スイス、ブルーメンシュタイン教会 (⑩-㉕)
1993年11月1日 大阪ザ・シンフォニーホール (ライブ) (㉔-㉕)

Recording Producer: Michael Haefliger
Recording Engineer: Dr. Peter Wangart
Editing Engineer: Anton Lanz

ヘフリガーは山田耕筈をどのように歌っているかという話

エルンスト・ヘフリガーが、日本歌曲をわざわざドイツ語に翻訳し、自分のレパートリーに入れたいと願ったのは、来日の機会が多いので自ずと馴染んだとか、日本歌曲全般に何となく興味を覚えたとかいった、漠然とした理由からではない。もっと具体的なのである。

彼は、初めに特定のひとりの作曲家を気に入って、その歌をどうしてもやりたくなったのだ。山田耕筈である。この3枚のCDシリーズには、耕筈の歌曲が、合わせると、全体の三分の一から半分弱ほど入っている。惚れ込みようが分かるというものだ。

するとヘフリガーは、お気に入りの耕筈を、どのように歌っているだろう？ 試みに、当盤の《からたちの花》を、聴いてみよう。

まず、冒頭の「からたちのながさいたよ」の「さいたよ」のところ。この2小節目から3小節目にかけてを、作曲家は弱音で始め、更にデミニュエンドしてゆくように指定している。ところが、ヘフリガーはむしろクレッシェンドしている。「さいたよ」の頭から後ろに向かって、音を強くしている。

次に、「しろいろいろいながさいたよ」の「さいたよ」のところ。この7小節目から8小節目にかけても、先の箇所と同様である。耕筈は、弱音から立ち上がって、どんどん減衰させてゆくように、楽譜に書いている。けれどもヘフリガーは、やはり徐々に力を増すように歌っている。

もうひとつ、そのあと、からたちのとげのくだりになって、「あをいあをいはりのとげだよ」の「とげだよ」と行くところ。この14小節目から15小節目にかけても、しつこいようだが、先のふたつの例と似た具合になっている。作曲家は「とげだよ」の「だよ」にデミニュエンドを付し、弱めてゆくように指図しているが、ヘフリガーは、必ずしもそれに従っていない。

どういうことなのか。ヘフリガーは、耕筈の歌を気に入りながら、作曲家の微に入り細を穿った強弱指定には、さほど頓着せず、自由に解釈しているということか。

いや、そうではないだろう。先に挙げた箇所は、すべて音程的には上がってゆくところだ。西洋音楽では、上行するなら音勢を強くし、下降するなら逆に弱くするのがいちばん自然である。声楽曲でも器楽曲でも、そうだが。

ところが、耕筈は、《からたちの花》のあちこちで、逆の指定をした。それは、日本語を日本語らしく歌うためにはどうすればいいかを探求した工夫だった。耕筈は、長唄や浄瑠璃に耳を傾けた。すると、そこでは西洋音楽と正反対のことが起きていた。音程が上がるときにはデミニュエンドが、下がるときにはクレッシェンドがかかることが、しばしばだった。

耕筈は発見したのだ。日本語では、音程の上と音勢の強弱の関係が西洋と逆であると。それを活かせば、日本語らしい響きを日本歌曲の世界に作り出すことができる。耕筈は、そういう強弱の付け方を、決して原理主義者のように徹底しはしなかったが、様々な声楽作品の要所々々で実践し

た。《からたちの花》の聴かせどころでも、そのようにした。それを、ヘフリガーは守らなかった。違うふうにした。

だが、それでいい。なぜなら、ヘフリガーは《からたちの花》をドイツ語で歌っているのだから。ここでは、ドイツ語を美しく聴かせる工夫が優先されなくてはならない。音程が上がるときは音勢が強くなり、下がるときは弱くなるという原則の方が、尊重されるべきなのだ。それでこそドイツ語の耕筈歌曲なのである。ヘフリガーの歌い換えは恣意的ではない。とても合理的である。

さて、その結果、何が起きるだろう。耕筈歌曲は、日本歌曲からドイツ・リートに変じるのだ。

そもそも耕筈は、キリスト教の賛美歌に親しんで育ち、シューベルトやメンデルスゾーンの作品に学びながら、創作をはじめた。そしてドイツに留学し、ベルリンの高等音楽院で、アカデミックな流儀をみっちり仕込まれた。シューマンの影響も強く受け、それよりも何よりもリヒャルト・シュトラウスに憧れた。この作曲家の心棒は、どこまでいってもドイツ音楽だった。そこに、日本語の響きと、たとえば強弱法による日本語の伝統的な鳴らし方の工夫を加味し、耕筈流の日本歌曲が造型されていったのだ。

その歌詞をドイツ語にし、日本語らしさを生むための強弱指定も括弧に入れてしまえば、あとに残るのは、耕筈の心棒としてのドイツだろう。早い話、耕筈歌曲は、地がドイツ・リートの骨法を備えたものが多いから、ドイツ語にしても、日本語に勝るとも劣らない。むしろ、よりよいということもあるかもしれない。

ヘフリガーは、それに気づいた。そして、耕筈歌曲の詞をドイツ語にするだけでなく、ドイツ語らしい表現に適うように楽譜を読み直して、名録音を成し遂げた。

もちろん、そこに練り広げられるのは、日本人作曲家による、ただのドイツ・リートもどきではない。耕筈独特の、息の短い旋律と繊細な和声の感覚によって織り上げられ、あたかも手先の器用な日本人が仕立てた具合になった、もうひとつのドイツ・リートの世界、日本化したドイツ・リートの世界である。

特に耕筈歌曲に関する限り、ヘフリガーと、その意を汲んだ訳詞者たちの仕事は、翻訳による日本歌曲のちょっとした海外への紹介という次元を超えている。それは、翻訳による新しい価値の創造であり、作品の隠された可能性の発見である。

【片山杜秀】

作曲家と作品について

このディスクに取められている作品のほとんどはよく知られているものですので、1曲1曲の解説は避けて、ここに登場している10人の作曲家と、その活躍の時代の特色、そしてそうした作曲家たちによってたらされた日本歌曲の発展の歴史をおおまかに辿ってみたいと思います。

このディスクに登場する10人の作曲家中、いちばん年代の早いのは岡野貞一(1878-1941)です。その生年1878年は明治11年に当り、翌12年によく文部省の音楽取調掛が設置され、8年後に東京音楽学校に昇格するというわが国の音楽界の揺籃期に当ります。ここに取あげられている岡野貞一の作品は「臘月夜」と「故郷」で、ともに高野辰之の詩によるもの、年輩の人たちにはとりわけ懐かしい学校唱歌でしょう。尤も文部省が小学校用の学年別唱歌集を刊行したのは1911年(明治44年)から16年(大正3年)にかけてですが、つづいて12年から15年にわたって吉丸一昌の著になる10冊の「新作唱歌」が刊行され、つづく年代には「大正幼年唱歌」12冊が後を追います(1915-18年)。

この1918年といいますと、鈴木三重吉の編集による児童雑誌『赤い鳥』創刊の年でもあり、その運動と呼応するように『赤い鳥童謡集』が8集刊行されました(1919-25年)。

こうした唱歌、童謡の発展期に活躍した作曲家の中には、このディスクにも登場する梁田貞(1885-1959)、中田章(1886-1931)、成田為三(1893-1945)のほか、弘田竜太郎、草川信、中山晋平、小松耕輔等の名前が記録されています。

尤も年代を考えますと、瀧康太郎(1879-1903)は岡野貞一にわずか1年おくれるだけで、ともに揺籃期の作曲家と考えてよいのですが、瀧はドイツに留学して本格的な作曲家への道を歩こうとした点では画期的な人物でしたが、ドイツに赴いてわずか2ヵ月で病気のために中断、帰国せざるを得なくなり、24歳という若さで夭逝したのは惜しんでもあまりありません。このディスクでは武島羽衣の詩による「花」と土井晩翠の詩への「荒城の月」が取められていますが、もし長生きしたならばたくさんの名歌曲を残したであろうことは疑う余地がなく、残念でなりません。

ドイツに留学したという点では成田為三もそうです。尤も成田について記すならその師山田耕筈のことを先に書かなければならないのですが、山田はあまりにも大きいため、すこし後に集中的な書きかたをしたいと思います。さて成田こそすでに記した『赤い鳥』に、西条八十の詩によって「歌を忘れたカナリヤ」なる名歌を発表した、童謡運動の作曲界の中心的存在の1人となります。ここでは林古溪による「浜辺の歌」ですが、これはドイツ留学以前の、山田耕筈に師事した最初の年、1916年の作品です。

世代論のうえでは成田よりも上に当る中田章は、今日では吉丸一昌の詩による「早春賦」ただ1曲によってですが、我が国の歌曲史から落すことのできない作曲家になっています。

降って大中寅二(1896-1982)になりますが、やはりドイツに留学したこと、彼の場合は教会の音楽家としての生活(音楽奉仕のための作曲と奉楽を含めて)から、基本的にはヨーロッパ音楽

の影響が強い作曲家です。でもこのディスクの島崎藤村の詩による「椰子の実」には、抒情的な面に加えて、叙事的な性格も加味されている点に特色が見られます。

さて世代上ではここに登場している10人中3番目に位置する梁田貞は、「城ヶ島の雨」で北原白秋の絵のような名詩に感興を得て、ヨーロッパの歌曲とは異なる、日本ふう情緒を盛りこむことに成功しています。

日本情緒といいますと、その4年後輩に当る杉山長谷夫(1889-1952)では、このディスクに聞く「出船」(勝田香月の詩)のような、日本の俗謡にも通じそうな、一種の大衆的な世界を歌いあわしました。彼の「花嫁人形」など、その感傷性ゆえに大衆的愛好へと拡がっていったのかもしれませんが、彼がいわゆるポピュラー系列の音楽家ならいざ知らず、室内楽運動の推進者でもあった当時の代表的ヴァイオリニストの1人ですので、作曲面において俗受けのする歌曲が作られたことはふしぎに思われます。

日本の情緒という点では近衛秀麿(1898-1973)の「ちんちん千鳥」(北原白秋の詩による)もまさに国籍の明瞭な作品です。近衛といいますとわが国産の世界に活躍した指揮者としての重要な人物ですが、当時であって外国をよく知っていた数少ない日本の音楽家であったゆえに、作品には国籍をおわせることの必要さを痛感したからこそした作品が作られたのではないかと思います。一方ではベートーヴェンをはじめとするヨーロッパの名曲の紹介の現場での活躍を行いながら、作曲の場合には日本人になっていた点に、彼の視野

の広さ、確かさを感じます。

このディスクでいちばん多くの作品が選ばれている山田耕筈(1888-1965)は、改めてここに記すまでもなく、日本歌曲の発展史上の最初の巨星です。彼はヨーロッパに留学して西洋音楽の技法と美学を深く体し、しかも作曲家と指揮者という、創造と再現の両道にわたる活躍を行った大型の音楽家でした。作品もオペラ、オーケストラ曲といった大曲を手がける一方、実に数多くの歌曲を作曲しました。その数は、童謡に分類される「赤とんぼ」や「待ちぼうけ」のたぐいも含めて、実に200(小品単位で数えて)にのぼります。それらのほとんどは1920年代まで、すなわち昭和の初期までの期間に作られましたが、その珍しい作品の出現ぶりに、当時の詩壇と楽壇にみなぎっていた、新しい歌曲創造のための運動エネルギーを感ずることができました。

彼がドイツに留学に赴いたのは1910年、22歳に当る青年期で、帰国は1914年、この間後期ロマン派音楽爛熟のドイツにおいて多大の刺激を受けて帰国した山田は、その後いわばかなりバク臭い手法と雰囲気による創作を行ったのも、自然の成りゆきだったと思われます。とりわけ和声法にドイツの古典的手法の堅固さが反映し、それゆえ日本歌曲を作る段においても構成の明確さを特色として、他の作曲家の情緒型とは一線を画する存在となったのです。

しかし逆に見ますと、作品の構成感の尊重とか、和声進行の自律性への配慮が先立つこともあり、日本語の語感がときにはこの次になる例も指摘さ

れます。私たちはすでに親しみきっているので、もしかしたらそうは感じないかもしれませんが、「夕やけこやけのあかとんぼ」で、「あ」から「か」に下降するメロディ・ラインは日本語の「赤」の、本来は上昇でなければならぬ語感とは食い違うものです。ゆえに山田の歌曲のある部分には、さながら外国語の作品の訳語のように聞こえる部分があることも否めないでしょう。

ヨーロッパがあまりにも遠く、本格的ヨーロッパの手法も美学も、堅固に体してきた人がいなかった時代の、留学帰りの山田がもたらした「ヨーロッパ風」は、さぞかし新鮮で魅力的だったことと思われれます。その新しさゆえに、「あかとんぼ」式のバク臭さも含めて広く受け入れられたのだらうと思われれます。

このディスクに聞く山田の歌曲のうち、いちばん年代の早いのは「風に寄せてうたへる春のうた」で、これは1920年（大正9年）の作曲です。この4部分から成る組曲は三木露風の詩によるものですが、三木は山田がとりわけ好んでその詩に作曲し、その数は計26曲にも及んでいます。元来が童謡であった「赤とんぼ」も同様に三木の詩ですが、こちらは1927年の作曲です。

しかし三木以上に山田が共感を抱いて作曲した詩人は北原白秋で、その数は42曲にもなります。すると山田の全歌曲の20パーセントは白秋の詩への付曲ということになります。このディスクに聞く上記2曲以外は、すべて白秋の詩です。

作曲年代順に記しますと「かやの木山」が1922年、「待ちぼうけ」が1923年、「からたちの花」と「ベチカ」が1925年、「この道」が1927年です。こ

う作曲年代を辿ってみますと、彼の歌曲の代表作は1920年代に作られたことがよく分かります。

これらの作品にはいずれも芯としてドイツ音楽の構成法、和声律が通っていますが、その中に時折日本の情感を感じさせるような特徴を持つ部分が織り込まれることがあります。「かやの木山」とか「この道」にそれを聞きとることは容易でしょう。さらにその面にもっと傾くと、このディスクには入っていませんが「中国地方の子守唄」のような、郷愁を誘うような曲調の作品としても結晶することがあるのです。

ポスト山田からはここに2人の作曲家が選ばれていますが、平井康三郎（1910-2002）と中田喜直（1923-2000）といえど誰の目から見ても山田以降の、最も重要な歌曲作曲家であるといえましょう。平井の歌曲のほとんどは1930年以降に属しますので、まさに山田の歌曲全盛期につづく世代となります。安定した構成の中に日本的な情感を盛りこんだ曲調の作品が多く、このディスクに選ばれている「平城山」（詩は北見志保子）や「九十九里浜」といった初期作品と、「日本の笛」全21曲（1942-43年）と「日本の花」全39曲（1944-46年）など、抒情派の代表作と目される作風をいつも保ちつづけていた作曲家です。

さらに世代が降るとその活躍の時期は第二次世界大戦の後に属します。わが国の音楽界が活気づき、特色を発揮し、世界に認められるようになる、その端緒がすでに戦後にはじまっています。

中田喜直は「早春賦」の中田章の次男ですが、堰を切ったように作られたその歌曲と合唱曲は、

たちまちのうちにわが国の音楽界に普及、滲透しました。習作ふうの作品は別にしますと、そのすべては1947年以降のもので、ここに聞く「雪の降る街を」は、元来が内村直也の台本による放送劇の挿入歌だったものが独立したものであり、1953年の作品です。

彼の歌曲でも合唱曲でも、歌詞のイントネーションにすなおに即応した旋律づけが特色でもあり、魅力でもあるので、それまでのわが国の作曲界がとかくドイツに学んだゆえの、やや四角張った構成感と機能と和声の粹組みの中での表現にくらべて、中田の作品は彼が関心を抱いていたフランス近代音楽の、柔軟さ、デリカシー、そして和声的には副三和音への傾斜等、それまでの日本歌曲の手法とは異なる世界を作りあげた点に特色が見られます。中田と同世代の諸作曲家と中田以降の多彩さについては、このディスクの曲目と直接の関係がないため、ここでは割愛させていただきます。

ヘフリガー讃

20世紀の最も偉大なテノール歌手、エルンスト・ヘフリガーを、わが国ではほぼ四半世紀にもわたって、何度も迎えています。最初の来日が1966年のベルリン・ドイツ・オペラの一員としてでしたが、その折に《魔笛》のタミーノ役のほか、かねてから評判の伝わっていたオラトリオ系列の名唱としてベートーヴェンの《ミサ・ソレムニス》、それにリート歌手として《美しき水車小屋の娘》と、一挙にこの歌手の3つの面に触れることができて、この年をもって忘れ難い名歌手とな

ってしまいました。

その後の来日ではオラトリオとリートの分野が主ですが、バッハの受難曲における名エヴァンゲリスト役をはじめ、降って現代曲では昨年のヒラーの「ヨブ」記に基づく異色作への、感動的な名唱と、その記憶を辿っていったならば紙面がいくらあっても足りないくらい、私たちはあまりにも多くの感銘を与えてもらってきたのです。

この名歌手がわが国の音楽祭の中でとりわけ内容の充実していることで評判の「草津音楽祭」（仮称で記します）の常連として何年にもわたって来日し、演奏面だけではなく、教育面でもわが国の若い声楽家たちにあまりにも本物の音楽の精神と表現法を会得させてくれたことは、私の親しい何人ものこの音楽祭の常連から毎年のように聞く話です。

こうしてわが国の楽壇と通りいっぺんでないかわりを持つようになったヘフリガーが、日本の歌曲の中から古典的な位置にある曲を選び、原則として世界に通用するようにドイツ語訳で歌うという試みを行ったことは、彼がいかに日本に深い友好の気持を抱き、日本の産んだ芸術に暖かい愛情を注いでいるかの証となることと思われれます。

ところで、日本歌曲をドイツ語に訳して歌うことに抵抗感を抱く人もおられるかもしれませんが。オペラならば訳詞もよいとしても、リート系列ではという考え方もあるでしょう。しかしここに選ばれている歌曲のほとんどは、ヨーロッパ音楽の影響のたいへん濃い旋律、和声進行などを特徴としており、ドイツ語を当てはめた時に、ともするとこちらがオリジナルではないかと思われるほど

詩と旋律がびったりする例が何曲もあることに気がつきます。

私たち日本人はこれらの曲をいままでさんざ日本語で聞いてきたため、いまここでドイツ語で歌われるのを聞くとふしぎな印象を受けるかもしれません。しかしこれらの曲を知らない人たちに、いきなりこのドイツ語歌唱を聞かせたら、なんの不自然な印象もなく、すんなりと受け入れてくれると思います。

そのゆえんの一つは、ヘフリガーの歌唱のすばらしさにかかっていることは言うまでもありません。1919年生まれのおかさまならば、私が生で聞いた1991年はすでに72歳です。しかし声についても唱法に関しても、なんの不足もなく、むしろ身体の中から自然に湧きあがって作品と一体となり、聴き手の心の深い部分にストレートに響いてくるその歌唱には、心を奪われない人はないと思

います。

彼は大曲を歌っても小品でも、いつも曲の心を自分の心と重ね合わせないで歌うことはありません。うまい歌というのを越えて、しみじみと心に響く感動的な歌がヘフリガーの歌唱です。暖かく、そして自然で、しかも風格があります。

このディスクに聞くほとんどの曲のドイツ語訳が村上紀子さんとマルグリット・畑中さん、実に音楽的な訳で、まるでオリジナルの作品のようにドイツ語が響きます。こうしてドイツ語で歌われる日本歌曲のおかげで、私たちはこれらの作品のよさを、改めて再発見することもできるのではないのでしょうか。加えて「風に寄せてうたへる春のうた」だけは、ヘフリガーの日本への友情の表明のように、日本語で歌われています。うれしいことですし、また美しいことと思われま

【菅野浩和】

1. 20 KONO MICHI Erinnerung

Ja, diesen Weg
seh ich mich einmal gehen.
Ja, ja, auf diesem Weg,
Akazienbäume seh ich,
Akazien seh ich blühen.

Ja, diesen Hügel
hab ich einmal gesehen.
Ja, ja, auf diesem Hügel
Seh ich den weißen Kirchturm,
hör ich die Turmuhr schlagen.

Ja, diesen Weg
Seh ich mich einmal gehen.
Ja, ja, auf diesem Weg
Seh ich mich mit der Mutter,
das Pferdchen hör', ich traben.

Ja, diese Wolke
hab' ich einmal gesehen.
Ja, ja, wie diese Wolke
seh ich die Blüten hängen
an Heckenrosenzweigen.

この道

この道はいつか来た道
ああ そうだよ
あかしやの花が咲いてる

あの丘はいつか見た丘
ああ そうだよ
ほら 白い時計台だよ

この道はいつか来た道
ああ そうだよ
おかさまと馬車で行ったよ

あの雲もいつか見た雲
ああ そうだよ
山査子の枝も垂れてる

2. MACHI BOUKE "Umsonst gewartet!"

Machibouke. –"Umsonst gewartet!"
Arbeiten tut der Bauer
emsig auf dem Feld.
Da kommt ein Has' gekollert
über den Baumstumpf.
Hab' ich Glück! Ein Has', ein Has'
üer den Baumstumpf!

Machibouke. –"Umsonst gewartet!"
Arbeiten tut der Bauer
nicht mehr auf dem Feld.
Bald kommt ein Hase wieder,
wart' ich nur darauf.
Komm komm komm, mein Has',
mein Has'
über den Baumstumpf!

Machibouke. –"Umsonst gewartet!"
Arbeiten tat der Bauer
gestern auf dem Feld.
Da macht er heute
in der Sonne Mittagsschlaf.
Komm du bald, mein Glück, mein
Has'
über den Baumstumpf!

Machibouke. –"Umsonst gewartet!"
Auch heute hat der Bauer
kein Glück auf dem Feld.
Da wartet er bis morgen,
wartet nur darauf,
wart', wart', wart', mein Has', mein
Has'
über den Baumstumpf!

Machibouke. –"Umsonst gewartet!"
Einst hatte hier der Bauer
ein gar schönes Feld.
Nun wuchert hier die Heide,
wächst nur wildes Kraut.
Und es weht ein kalter Nordwind
über den Baumstumpf.

待ちぼうけ

待ちぼうけ 待ちぼうけ
ある日せつせと 野良かせぎ
そこへ兎が とんで出て
ころり転げた 木の根っこ

待ちぼうけ 待ちぼうけ
しめたこれから 寝て待とか
待てばえものは かけてくる
兎ぶつかれ 木の根っこ

待ちぼうけ 待ちぼうけ
きのうの鎌とり 畑仕事
きょうは頬づえ ひなたぼこ
うまい切り株 木の根っこ

待ちぼうけ 待ちぼうけ
きょうはきょうはで 待ちぼうけ
あすはあすはで 森の外
兎待ち待ち 木の根っこ

待ちぼうけ 待ちぼうけ
もとはすずしい 黎畑
今は荒野の ほうき草
寒い北風 木の根っこ

鳴く夜さは
ガラス戸しめてもまだ寒い
まだ寒い

ちんちん千鳥の鳴く声は
鳴く声は
燈を消してもまだ消えぬ
まだ消えぬ

ちんちん千鳥は親ないか
親ないか
夜風にふかれて川の上
川の上

ちんちん千鳥よお寝らぬか
お寝らぬか
夜明けの明星が早やしらむ
早やしらむ

3 CHIN CHIN CHIDORI Regenpfeifer

Hört nur, die Regenpfeifer
rufen heute nacht,
rufen heute nacht.

Kalt ist es, auch wenn die Läden
fest sind zugemacht,
fest sind zugemacht.

Hört nur, die Regenpfeifer
woll'n verstummen nicht,
woll'n verstummen nicht.
Ihre Stimmen rufen weiter,
lang löschten wir das Licht.
löschten wir das Licht.

Habt ihr, ihr Regenpfeifer
denn kein Mütterlein?

Hoch treibt euch der Nachtwind weiter
über Fluß und Hain,
über Fluß und Hain.

Wollt ihr, ihr Regenpfeifer
noch nicht schlafen geh'n?
Seht ihr nicht den blassen
Morgenstern am Himmel steh'n?

ちんちん千鳥

ちんちん千鳥の鳴く夜さは

Froschkonzert verkingt am Weiher,
Glockenschlag gedämpft verhallt.
Sacht der zarte Nebelschleier
steigt auf zum Bergeswald.

おぼろづきよ
朧月夜

菜の花島に 入日暮れ
見わたす山の端 霞ふかし
夜風そよふく 空を見れば
夕月かかりて におい淡し

里わの火影も 森の色も
田中の小路を たどる人も
蛙のなくねも かねの音も
さながら復める 朧月夜

5 FURUSATO An die ferne Heimat

Ging auf die Hasenjagd
in Feld und Wald.
Fing Fischlein unverzagt
im Bächlein kalt.

Im Wachen, im Träumen,
mit den Freunden und allein:
Du ferne Heimat – ich denke dein.

Vater und Mutter mein,
geht es euch gut?
Und ihr Gesellen fein,
habt frohen Mut.
Im Regen, im Winde,
in der Sonne warmem Schein:
Du ferne Heimat – ich denke dein.

Hab' ich mein Ziel erreicht,
fand ich mein Glück,
fällt hier der Abschied leicht,
kehr' ich zurück.
Grün die Berge, weit die Felder,
und das Wasser klar und rein:
Du ferne Heimat – ich denke dein.

ふるさと
故郷

鬼追いしかの山
小断釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷

如何にいます父母
恋なしや友がき
雨に風につけても
思いいずる故郷

こころざしをはたして
いつの日にか帰らん
山はあおき故郷
水は清き故郷

6 HANA Blüte

Frühlingsluft, so lau und lind,
Kirschenbäume blüb'n.
Und stromauf, stromab im Wind
Ruderkähne zieh'n.
Perlegleich das Wasser blinkt
im Sonnenglanz.
Oder ist, was blitzt und winkt,
Blütenblättertanz?

Kirschenbaum im Morgentau
ruft uns Grüße zu.
Weidengrün im Abendblau
wünscht uns gute Ruh.
Frühlingsluft so lau und lind
im Mittagslicht.
Frühlingsduft im Blütenwind:
Schöneres weiß ich nicht.

Dämmerung sich niederneigt
auf den Blütenhain.
Über Strom und Ufer steigt
Mond im Schleierschein.
Frühlingsluft so lau und lind
im Mondenlicht.
Frühlingsduft im Abendwind:
Schöneres weiß ich nicht.

花

春のうららの 隅田川
のぼりくだりの 船人が
權のしずくも 花と散る
ながめを何に たとうべき

見ずやあけほの 露あびて
われにも言う 桜木を
見ずやたぐれ 手をのべて
われさしまねく 青柳を

錦おりなす 長提に
暮るればのほる おほろ月
げに一刻も 千金の
ながめを 何にたとうべき

7 JOGASHIMA NO AME Regen auf der Insel Jogashima

Regen, Regenschleier
auf der Insel Jogashima.
Im grauen Regendunst,
im grauen Regendunst.
Regen. Sind es Perlen?
Ist es Nebel im Morgengrau'n?
Sind's Tränen gar? Sind's Tränen,
so heimlich geweint?

Schon fliegt das Boot übers Meer,
hoch der Bug, von Gischt
umschäumt.

Hoch grüßt das Segel im Wind:
meines Geliebten Boot.
Heja, heja, rud're das Boot!
Rud're das Boot und sing' dein
Lied,
rud're und singe dein Lied, Schiffer,
aus Herzenslust!

Regen, Regenschleier,
Wolken trüben das Morgenlicht.
Das Boot fährt, weit, so weit –
Das Segel seh' ich nicht mehr.

城ヶ島の雨

雨はふるふる 城ヶ島の磯に
利久風の 雨がふる

雨は真珠か 夜明けの霧か
それともわたしの 惹ひ泣き

舟はゆくゆく 通り矢のはなを

濡れて帆上げた めしの舟

ええ 舟は櫓でやる
櫓は歌でやる
歌は船頭さんの 心意気

雨はふるふる 日はうす曇る
舟はゆくゆく 帆がかすむ

⑧ HAMABE NO UTA
Am Meer

Im Morgengrau'n am Strande
geh' ich so für mich hin.
Folg' Spuren da im Sande,
Vergangenes im Sinn.
Wie einst das Windeswehen,
wie einst das Wolkenbild.
Und Wellen kommen, gehen,
und Muscheln, farbverhüllt.

Die Dämmerung am Strande,
ich geh' so für mich hin.
Folg' Spuren da im Sande,
Vergangenes im Sinn.
Wie einst der Mond
verschwommen,
wie einst der Sternenschein.
Und Träume gehen, kommen,
wie Wellen woll'n sie sein.

浜辺の歌

あした浜辺をさまよえば
昔のことぞ忍ばるる
風の音よ 雲のさまよ

寄する波も かいの色も

ゆうべ浜辺をもとおれば
昔の人ぞ忍ばるる
寄する波よ かえす波よ
月の色も 星のかけも

はやちたちまち波を吹き
赤裳のすそぞぬれひじし
病みし我はずでにいて
浜の真砂 まなごいまは

⑨ KOJO NO TSUKI
Ruine im Mondschein

Burgeshöh' in Frühlingsnacht.
Trinken wir den Wein!
Schimmernd weiß die Blütenpracht.
Singt – und schenket ein!
Durch die alten Kiefern weit
bricht das Mondeslicht.
Mondeslicht aus alter Zeit
such' ich, find' ich nicht.

Ritterheer in Wintermacht
ruht in Frost und Schnee.
Und ich zähle auf der Wacht
Wildgänse in der Höh'.
Auf den Schwertern, aufgereiht,
blitzt das Mondeslicht.
Mondeslicht aus alter Zeit
such' ich, find' ich nicht.

Burgruine, Mitternacht.
Mild das Mondeslicht
leuchtet Jähr un Jahr so sacht.

Scheit es mir denn nicht?
Immergrün im Mauerspalt,
Efeu ihn durchzieht.
In dem alten Kiefernwald
singt der Sturm sein Lied.

Firmamente, Himmel gar
Ewigkeiten gleich.
Wechselhaft und wandelbar
ist das Erdenreich.
O du Mensch, gedenk, hab acht,
und vergiß es nicht.
Burgruine, Mitternacht,
mild das Mondeslicht.

荒城の月

春高樓の 花の宴
めぐる盃 かげさして
千代の松が枝 わけいでし
むかしの光 いまいずこ

秋陣営の 霜の色
鳴き行く雁の 数見せて
植うるつるぎに 照りそいし
むかしの光 いまいずこ

今荒城の 夜半の月
かわらぬ光 たがためぞ
垣にのこるは ただかつら
松に歌うは ただ嵐

天上影は かわらねど
榮枯は移る 世の姿
写さんとてか 今もなお
ああ荒城の 夜半の月

⑩ YUKI NO FURU MACHI O
Grüß mir die tief verschneite
Stadt

Grüß mir die tief verschneite Stadt!
Grüß mir die tief verschneite Stadt,
wo der Schatten meiner Erinnerung
verweht,
grüß mir die tief verschneite Stadt!
Dunkel, schwer, weht und weht die
Erinnerung daher.
Ach, ich wollt', sie möge doch,
ach, ich wollt', sie möge doch
irgendwann einmal umhüllt sein
von der sonnigen,
von der sonnigen Glückseligkeit.

Grüß mir die tief verschneite Stadt!
Grüß mir die tief verschneite Stadt,
wo die Schritte meiner Erinnerung
mir folgen,
grüß mir die tief verschneite Stadt!
Dunkel, schwer, füllt und füllt sich
die Traurigkeit in mir.
Ach, ich wollt', sie möge doch,
ach, ich wollt', sie möge doch
irgendwann einmal verweht sein
von dem duftenden,
von dem duftenden
Vorfrühlingswind.

Grüß mir die tief verschneite Stadt!
Grüß mir die tief verschneite Stadt,
wo mein Herz, das niemand
verstehen will, noch schlägt.
Grüß mir die tief – verschneite
Stadt!

Dunkel, schwer, sehnt und sehnt
sich mein Herz so sehr.
Ach, ich wollt', es möge doch,
ach, ich wollt', es möge doch
irgendwann einmal erfüllt sein
von dem hellen Klang,
von dem hellen Klang: Glockengeläut.

雪の降る街を

雪のふるまちを
雪のふるまちを
思い出だけが通りすぎて行く
雪のふるまちを
遠いところから 落ちてくる
この思い出を
この思い出を
いつの日か包まん
あたたかき幸せのほほえみ

雪のふるまちを
雪のふるまちを
足音だけが追いかけて行く
雪のふるまちを
一人ところに 満ちてくる
この哀しみを
この哀しみを
いつの日かほくさん
緑なす春の日のそよ風

雪のふるまちを
雪のふるまちを
息吹とともに こみあげてくる
雪のふるまちを
誰もわからぬ わが心
このむなしさを
このむなしさを

いつの日か祈らん
新しき光降る鐘の音

⑪, ⑫ SOSHUNFU
Sehnsucht nach dem Frühling

Muß auf den Frühling warten.
Noch weht ein kalter Wind.
Die Nachtigall im Garten
sich auf ihr Lied besinnt.
Doch weil es noch zu früh ist,
so schweiget sie fein stille,
doch weil es noch zu früh ist,
so schweiget sie fein still.

Im See das Eis will tauen,
im Schilf schon Knospenzeit.
Kann ich dem Frühling trauen?
Nein, nein, zu früh die Freud'.
Wie gestern hängt auch heute
der Himmel voller Schnee.
Wie gestern hängt auch heute
der Himmel voller Schnee.

Hätt' ich doch nicht vernommen,
der Frühling sei schon nah!
Mein Herze so beklommen,
weiß nicht, wie ihm geschah.
Mein Sehnen und mein Hoffen:
O Frühling, wärst du da!
Mein Sehnen und mein Hoffen:
O Frühling, wärst du da!

早春賦

春は名のみの 風の寒さや

谷のうぐいす 歌は思えど
ときにあらずと 声もたてず
ときにあらずと 声もたてず

氷とけさり あしはつのごむ
さては時ぞと 思うあやにく
きょうも きのうちも 雪の空
きょうも きのうちも 雪の空

春ときかねば 知らでありしを
きけば怠かる 胸の思いを
いかにせよとの この頃か
いかにせよとの この頃か

17 SAKURA SAKURA Kirschblüte

Blütenbaum. Blütenbaum.
Kirschenbaum im Blütenraum.
Märzenhimmel sieht man kaum.
Nebel oder Wolkenflaum?
Süßer Duft vom Blütenbaum.
Komm, wir gehn, komm, wir gehn,
die Pracht anzusehn.

さくらさくら

さくら さくら
やよいの空は 見渡すかぎり
霞か雲か 匂いぞいずる
いざや いざや 見に行かん

18 KARATACHI NO HANA Quittenhecke

Die Quittenheck, trägt wieder weiße
Blümelein,
Blümelein, Blümelein so weiß,
so blütenweiß.

Der Quittenhecke Dornen geben
Schmerz und Pein.
Quittendorn, Quittendorn, nadelspitz
und grün.

Die Quittenhecke ranket sich am
Feldesrain,
tausendmal, tausendmal ging ich
den Weg dahin.

Der Quittenhecke Früchte leuchten
golden schön.
Quitten rund, Quitten rund im
Herbst
leuchten wie Gold.

Am Quittenheck', am Quittenheck'
hab ich geweinet.
Und die, die mich geseh'n,
die waren gut zu mir.

Die Quittenheck' trägt wieder weiße
Blümelein,
Blümelein, Blümelein so weiß,
so blütenweiß.

からたちの花
からたちの 花が咲いたよ

白い白い 花が咲いたよ

からたちの とげはいたいよ
背い背い 針のとげだよ

からたちは 畑の垣根よ
いつもいつも とおる道だよ

からたちも 秋はみのるよ
まるいまるい 金のたまだよ

からたちの そばで泣いたよ
みんなみんな やさしかったよ

からたちの 花が咲いたよ
白い白い 花が咲いたよ

19 YASHI NO MI Kokosnuß

Von einer Insel,
von Strande Irgendwo trieb
her eine Kokosnuß
mir ans Gestade.
Seit du deinen Heimatstrand
verlassen – o sag':
Wie viele Monate bist du schon
unterwegs?

Auf deiner Insel
am Strande Irgendwo
gedeihet der Palmenbaum
und spendet Schatten.
Hab' auch ich mein Heimatland
verlassen – und
schlaf –

wie viele Nächte schon? – am
Strand, auf
Wanderschaft.

Sei mir willkommen,
du liebe Kokosnuß, wie
sehr brennt das Heimweh mir
wieder im Herzen.
Sieh, die Sonne sinkt, es brennt der
Himmel, o sag
wie viele Tränen weint' ich auf der
Wanderschaft?

Verweilt, Gedanken, auf den
Wellen,
seid getrost.
Einst kehre ich zurück, zurück in
mein geliebtes
Heimatland.

椰子の実

名も知らぬ 遠き島より
流れ寄る 椰子の実ひとつ
故郷の 岸を離れて
汝はそも 波に幾月

旧の樹は 生いや茂れる
枝はなお 影をやなせる
われもまた 渚を枕
ひとり身の 浮き寝の旅ぞ

実をとりて 胸にあつれば
新たなり 流離の憂い

海の日 沈むを見れば
激り落つ 異郷の涙

思いやる 八重の汐々
いずれの日にか 國に帰らむ

20 KAYA NO KIYAMA Maronenberg

Dort auf dem Berg
gibt es Maronen.
Maronen gibt es dort.

Und eines Tags
regnet es Maronen.
Geh hin und trag sie nach Haus.

Großmütterchen im Berghüttchen
schürt den Ofen schon.
Hol' Reisig heran,
das Feuer mach an!
Maronen in die Glut!
Knister knaster, knister knaster,
holla aufgeplatzt!

Auch heute nacht
regnet es wieder.
Laßt uns schlafen.
Da ruft das Käuzchen.
Es ruft uns zu:
Schlaft alle, schläft, schläft!

かやの木山

かやの木山の
かやの実は
いつかこぼれて
ひろわれて

山家のお婆さは
いろり端
粗染たき 柴たき
燈つけ

かやの実 かやの実
それはぜた
今夜も雨だろ
もう寝よ

お狼が鳴くだで
早よお寝よ

21 NARAYAMA Narayama

Eines Menschen Lieb'
ist Trauer tragen und Leid.
Am Narayama
wandere ich wieder weit.
Kaum ertrag ich meinen Schmerz.

Auch in alter Zeit,
im Gedenken seiner Lieb';
ging man auf den Berg
Narayama. Auf dem Weg
unzählig viele Tränen.

平城山

人恋うは
悲しきものと
平城山に
もとほり来つつ
たえ難かりき

いにしえも
夫に恋いつつ
越えしとう
平城山の路に
涙おとしぬ

負われて見たのは いつの日か

山の畑の 桑の実を
こかごにつんだは 幻か

十五でねえやは嫁に行き
お里の便りも 絶えはてた

夕やけこやけの 赤とんぼ
とまっているよ さおの先

17 AKA TONBO Erinnerung an die Kindheit

Abendrot, es flog im Abendrot
die Libelle fein,
als mich heim das Kindermädchen
trug.
Wann mag das gewesen sein?

Auf des Berges Feldern pflückten
wir vom Maulbeerbaum
frische Beeren in das Körbchen.
Oder war das ein Traum?

Kindermädchen ging als Braut schon
fort,
als sie fünfzehn war.
Aus der Heimat schickt sie keine
Nachricht.
Und ich warte Jahr um Jahr.

Abendrot, Sieh', wie im Abendrot
die Libelle schwirrt!
Sieh', wie sie sich auf der
Bambusspitze
niedersetzen wird.

赤とんぼ

夕やけこやけの 赤とんぼ

18 PECHIKA Am Kamin

Heut' abend schneit es wieder.
O wie warm ist's am Kamin,
am Kamin, wo's Feuer brennt,
erzählen wir ein Märchen.
"Es war einmal in alter Zeit..."
Am Kamin, wo's Feuer brennt.

Heut' abend schneit es wieder.
O wie warm ist's am Kamin,
am Kamin, wo's Feuer brennt,
Draußen so kalt und frostig.
Eilt alle her, eilt her zu mir,
zum Kamin, wo's Feuer brennt.

Heut' abend schneit es wieder.
O wie warm ist's am Kamin,
am Kamin, wo's Feuer brennt,
denk' ich an Lenz und Blumen,
die Weiden stehen hellgrün dann...
Im Kamin, das Feuer brennt.

Heut' abend schneit es wieder.

O wie warm ist's am Kamin,
am Kamin, wo's Feuer brennt,
Da horch, es klopft. Wer ist da?
Du lieber Gast, komm nur herein,
zum Kamin, wo's Feuer brennt.

Heut' abend schneit es wieder.
O wie warm ist's am Kamin,
am Kamin, wo's Feuer brennt,
erzählen wir Geschichten.
Wie wohlig warm, wie rot die Glut
im Kamin, wo's Feuer brennt.

ベチカ

雪の降る夜は 楽しいベチカ
ベチカ燃えろよ お話しましょ
昔 昔よ 燃えろよ ベチカ

雪の降る夜は 楽しいベチカ
ベチカ燃えろよ 表は寒い
くりやくりやと 呼びますベチカ

雪の降る夜は 楽しいベチカ
ベチカ燃えろよ じき春来ます
今にやなぎも もえましょベチカ

雪の降る夜は 楽しいベチカ
ベチカ燃えろよ だれだか来ます
お客さまでしょ うれしいベチカ

雪の降る夜は 楽しいベチカ
ベチカ燃えろよ お話しましょ
火の粉ばちばち はねろよベチカ

19 DEHUNE Abschied

Heut' abend läuft dein Schiff aus,
O wie weh ist mir im Sinn.
Schneeflocken
wirbeln weiß auf dunklen Wellen
hin.
Seh' ich dein Schiff nicht, sing'
ich dir ein kleines Abschiedslied,
das mit dem Schrei des
Regenpeifers
zu dir zieht.

Nun läuft das Schiff schon aus, es
tönt das Nebelhorn so tief.
Wenn du gut
angekommen, schreib mir einen
Brief!
Im dunklen Kämmerlein
beim Kerzenflackerscheine hier
werd' ich ihn weinend lesen. Ach,
wär'
ich bei dir!

出船

今宵出船か お名残り惜しや
暗い波間に 雪が散る
船は見えねど 別れの小唄に
沖じゃ千鳥も 泣くぞいな

今鳴る汽笛は 出船の合図
無事で着いたら 便りをくりやれ
暗いさみしい 灯影の下で
涙ながらに 読もうもの

風に寄せてうたへる春のうた

20 青き臥床をわれ飾る
青き臥床をわれ飾る。
春の恋ぐさ種々の花をつくして、
また君がため白地なす
祝ひの風の素絹もて、
熱き日光を避けまつらむ。

21 君がため織る綾錦
君がため織る綾錦
春の被衣の恋ごろも
真昼となれば妙に投ぐ
あわれ床しき風の梭。

22 光に顔ひ日に舞へる
光に顔ひ日に舞へる
汝が吹く笛の調べこそ
恋するものの心にか、
熱き涙とあこがれと
風はさあらぬ節まはし。

23 たたへよ、しらべよ、歌ひつれよ、
たたへよ、しらべよ、歌ひつれよ、
春ぞ来ぬと風の群、
たたへよ、しらべよ、歌ひつれよ、
げににぎはる恋幸を。まことの幸を。